

日本という国に生まれながら、  
その音楽について、私達はどうぞ  
知っているのだろう。音楽を通して、日本人が  
大切にしてきたものを探る。

## 一 奈良から日本音楽の旅に出る

第十六回

村屋坐彌富都比元神社「代々神樂」

文 堀内みさ  
写真 堀内昭彦  
協力 村屋坐彌富都比元神社  
canon

# 音楽のふるさとを訪ねて

「『だいだい』と口伝えでしか聞いていませんので、実はどんな字を書くかまではわからないんです」。村屋神社の宮司、守屋泰尚さんは言う。この神社で、毎年秋祭りの宵宮と本祭で舞われている代々神樂の、「代々」の意味を尋ねたときのことである。

実は「だいだい神樂」で調べると、その多くが、「太々神樂」と「太」という字を重ねてあり、「代々」の字はあまり見かけない。ちなみに太々神樂とは、一般の巫語人が伊勢神宮へ奉納する神樂（太神樂）の中でものとも大がかりな神樂の意味で、太神樂は、それから転じて江戸時代の大道芸を指す言葉になつた。一方、村屋神社の代々神樂は、この神社でまさに代々受け継がれてきた独自のもの。「だから『代々』という字を私が当たなんです」。

守屋宮司は言う。

さらに、この神樂はいつ始まつたかがわからぬ。記録が一切残っていないのだ。当社は足利尊氏、織田信長の時代と二回焼かれているので、江戸から以前の記録はすべてないのです」と守屋宮司。楽譜もないため、明治中期まで奏されたという笛も現在は途絶え、この代々神樂も太鼓だけで舞われている。口伝えを受け継いでいくことが、いかに大変かということだ。

現在舞われている舞は、全部で八つ。

平舞、三三九度舞、扇の舞、柳の舞、一本剣の舞、一本剣の舞、鉢の舞、雉刀の舞、鉗子の舞。それに湯立て神事（御湯の舞）である。「かつては」「と」というのもあつたようです」。ちなみにこの代々神樂は、奈良県中部地区に今も残る神楽舞のほとんど原型になつているなど、何らか影響を与えてい

るという。さすがは古社である。

村屋神社の正式名称は、村屋坐彌富都比壳神社。大国主命の后神、三穗津姫命（別名、弥富都比壳神）を主祭神とし、大和三道のひとつ、中つ道に面して鎮座する。ちなみに記紀神話では、大国主命と大物主命は同じ神。つまり村屋神社は、大物主命を御祭神とする大神神社の別宮にあたるのだ。



鏡子の舞。長く途絶えていたが、守屋宮司が復興させた。



⑤湯立て神事。採り物の笛は12本束ねて12回ぐるり、さらに13回ぐる。12は1年の月の数。旧暦だと閏月があるため、13回でもぐるという。

⑥すべてが終わったら、平舞で締めくくられる。

⑦⑧鏡子の舞では巫女二人が紙で作った推進それぞれの蝶を付けた鏡子を持ち、同時に結界内を歩く。代々神楽の足運びは能と関係があるのではと守屋宮司は言つ。

⑨⑩二本剣の舞では、剣をクロスさせながら中央の前後に向かって旋回する。⑪舞のはほとんどは採り物を持って結界の中を歩き、四方や中央前後に向かって早足で移動。その場をお祓いするように、採り物を左右交互に動かす。

⑫舟の舞。「代々神楽は、散楽などから差し掉りのない部分を取り上げ、洗練させていった」のではと守屋宮司。

⑬二本剣の舞。

⑭扇の舞。宵宮では稚兒たちが舞う。

そんな村屋神社が歴史の表舞台に登場するのは、壬申の乱のとき。日本書紀によれば、そのとき村屋神が神主にのりうつり、「わが杜の中を敵が来る。杜の中つ道を防げ」と、大海人皇子方の將軍に助言をし、この功績から、神社として当時はじめてという。天皇から位を賜ったとされている。代々の宮司の姓が「守屋」になったのも、そのときから。もともと、物部守屋の孫がこの地へ逃げてきたと伝わるこの神社では、以来宮司は「守屋」という姓を名乗っていたが、壬申の乱の手柄で「守屋」姓が許されたのだという。もともと、物部守屋は強硬な廢仏派。仏教が全国的に盛んだった江戸時代は、遠慮して一時「森本」姓に変わったこともあるが、廢仏毀釈からは再び「守屋」姓に戻ったという。奈良では、歴史は土地の中でひつそりと、だが脈々と息づいているのだ。

代々神楽の舞は、いたたってシンプルだ。巫女が手に鈴を持ち、右に一回、左に一回、そしてまた右に一回旋回する。巫女が手に鈴を持ち、右に一回、左に一回、そしてまた右に一回旋回する。神楽の基本、平舞にはじまり、次に、右に三回、左に三回、右に三回旋回する。三回九度舞。さらには剣や鉾、薙刀などの採り物を持ち、結界の中を歩いては、ときに四隅で、ときに中央の前と後ろに向かって、足をリズミカルに動かしながら、まるで空気を切るよ

ういう発想には、その源が同じであるよう共通点が感じられる。ちなみに、この呪師の行法の威力を、一般参詣人に對して具体的に演技化して示したのが、呪師猿樂となり、後に他のさまざま要素と一緒になつて、猿樂、ひいでは能樂が形成されていくのである。「そもそも田原本は能樂に關わるところ」と守屋宮司も言う。たしかにこの町には、秦河勝が、「秦氏の楽人の寺」なる「杜屋郷」には、平安時代、伎樂や舞楽、そして、猿樂のルーツと言われる散樂の選り抜きの楽人たちが住む樂戸郷が存在したと記されている。

「奈良時代に唐から入ってきた雅樂を、神社ではじめて奉納したのも村屋神社です」と守屋宮司。さらに世阿弥がこの杜屋郷の出身だと記されている。

「奈良時代に唐から入ってきた雅樂を、では、なぜ田原本に楽人が集中したのだろう。この地には他にも鍛冶屋とか、水利土木の専門職など、さまざまな技術者が住んでいました。當時特殊な技術を持っていた人は、みな外來人。その人たちが日本に来て、どこに住ま



村屋坐彌富都比売神社・宮司  
守屋広尚（敬称略）  
50年以上にわたり、当神社にて  
宮司を務める。



わせるかとなつたとき、一番土地が空いていたのが、飛鳥から少し外れているこの辺りだったのではないでしようか。おそらく朝廷が、集団でこの辺りに土地を与えたのでしょうか。奈良時代に中国から伝わった散樂は、雅樂に対して俗樂の意味を持つていた。そして、徐々に農村などに古くから伝わる樂を取り込み、洗練されて猿樂、能樂になつていったという。その過程で代々神楽はどう関わっていたか。おそらく互いに影響を与え、また受けたことだろう。代々受け継がれてきたという、長い歴史の重みを改めて感じた。



「舞」というよりは、お祓いの所作でしかない。守屋宮司は言う。対して浦安の舞は奉納する舞。目的が違うのだ。つまり代々神楽は、舞を舞つて、お参りに来た方をお祓いする、本来はお参りする前に舞われる舞という。さらに「番大事なのは湯立てです。舞はそこへいくためのもので、最初は単純に、湯立てしかなかつたろうと思います。時代とともにだんだん増えていったのでしょう」と守屋宮司。中でも、二本の短刀をクロスして持ちながら旋回する「二本剣の舞」は、薬師寺の法会、「花会式」で、呪師といつ役割の僧侶が、一本の長刀を持つて歩く場面を想起させる。もっとも、代々神楽は怪、花会式は夜の暗いお堂の中で行われ、雰囲気も所作も大きく違う。だが、二本の刀をクロスさせて厄払いをする

